

『緋文字』一考察
 —作品世界とナサニエル・ホーソン心象風景の同一性—

野呂 浩*

Nathaniel Hawthorne's Shadow in *The Scarlet Letter*

Hiroshi Noro

Scholars of American literature have produced innumerable interpretations on Nathaniel Hawthorne's masterpiece *The Scarlet Letter*. Notably, each different approach to the work has revealed a different viewpoint hidden within the story. Here, the story is to be analyzed in relation to the lifelong inner angst of author Nathaniel Hawthorne.

This new approach shows the main characters to be individuals into whom the depth of Nathaniel Hawthorne's psychological mindset has been projected. Arthur Dimmesdale, a young minister, reflects the author's internal struggle over his ancestor's past involvement in the judgement of witches, including at the Salem witch trial in 1692. Chillingworth, a diabolical man, represents Nathaniel Hawthorne's sense of guilt, and shows his commitment as an artist to observing people's inner souls. Hester's freethinking manner and way of life can be seen as Nathaniel Hawthorne's strong determination to become an independent artist, and one who is never to fall victim to the stains of the past and society. Nathaniel Hawthorne's longing for British culture is reflected in Pearl.

The particular end that each character meets can also be interpreted as carrying its own unique message. Nathaniel Hawthorne is very negative about Chillingworth; the author shows no sympathy for his own inevitably sinful fate of peeping into people's inner souls. The implications of Dimmesdale's death after his final confession on the scaffold are somewhat ambiguous. It is uncertain whether he was saved or severely judged. More likely, there is a mixture of both elements, and his death clearly shows us that the sinful lifestyle of Nathaniel Hawthorne's ancestors must end. Hester ultimately returns of her own free will to the puritan society of Boston, after having lived for a while in the Old World with her daughter Pearl. Hester's return tells us that Nathaniel Hawthorne's desire for freedom includes the possibility of serving the puritan society. Pearl is the only character alive at the end of the novel, happily married, and possibly in England. Nathaniel Hawthorne's decision to live as an artist includes aspirations of British heritage.

Dimmesdale's inherited strong animal nature is the root of the persecuting spirit in the history of the author's' ancestors. Therefore, the scarlet letter A in the story can be interpreted as the initial letter of the word 'animal.'

I

ディムズデイル牧師が、米国 19 世紀作家、ナサニエル・ホーソンの傑作である『緋文字』の重要登場人物であることを疑う者は誰もいない。ただ、その重要さの内容によって、物語の世界が全く異なるものに見えてこよう。

ディムズデイル牧師は、物語の開幕から閉幕まで極度の緊張の連続を体験する人物であるが、ヘスターには、ディムズデイル牧師程の内的葛藤はない。さらに、ディムズデイル牧師とヘスターとの秘められた関係をうすうす感じ取り、復讐の鬼と化すヘスターの法律上の夫チリングワースも、ディムズデイル

*東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授
 2001年9月10日 受理

ル牧師のような重苦しい緊張で悩むことはない。勿論、ディムズデイル牧師とヘスターの二人の愛の結晶であるパールにも、激しい緊張感のようなものはない。

となると、登場人物の緊張の度合いから判断するならば、間違いなくディムズデイル牧師が物語の中心人物であることになり、当然、物語の世界を把握する為に、ディムズデイル牧師の熾烈な苦闘そのものの中身を読み解かなければならなくなる。

ディムズデイル牧師の抱える問題を、宗教的罪と考へ、それが原因で様々な悪へと傾斜して行く過程を描くと看做す、the orthodox Puritan reading もあれば、罪深い体験がむしろ精神的成長に繋がると理解する、the Fortunate Fall reading もある。さらには、人間の自然な欲求に基づく行為を裁く社会が問題と考へる the Romantic reading、ディムズデイルやヘスターの罪そのものが重要なのではなく、自己を信頼せずに罪を隠すことを問題視する、the transcendental reading、罪が個人の心理に影響を与えるのは事実であるが、罪意識というのはその人物がどのようなことが罪深いと考へるかによると読む、the relativist reading 等が一般的によく知られている解釈である¹⁾。この他にも、神話的解釈²⁾、さらには、ディムズデイル牧師がチリングワースにより毒殺されると読む論文が医学雑誌に発表されている³⁾。最近ではフェミニズムの観点からの読みが盛んである。

兎に角、ありとあらゆる観点から分析されてきた作品であり、今さら新たな読みを探すのは殆ど不可能に近い小説である。筆者は、以前、新しい読みとして、特にディムズデイル牧師のあまりにも痛々しい病的特質に着目して、ディムズデイル牧師個人の病気に見えるのは、実は、英国エリザベス朝時代文化とボストンピューリタン社会価値観の狭間で悩む移民の精神構造を扱う物語との解釈を提示した。今回は、作家ナサニエル・ホーソンの先祖の歴史、ナサニエル・ホーソンが生涯心の奥深い所に抱えていたと考へられる苦悩との絡みで物語を再精読し、もう一つの新たな読みの可能性を探るのが狙いである。

II

ディムズデイル氏は牧師であるが、物語の冒頭か

ら、いきなり、特殊な緊張を抱く人物として登場する。ディムズデイル青年牧師は、ヘスターの密通の相手であるにもかかわらず、公衆の面前で、ヘスターには相手の名前を告白しなさいと迫る役割を演じさせられる。仮に、ヘスターがあなたこそその相手ですとその場で告白してしまえば、即座に、聖職者であるディムズデイル青年牧師はヘスターと同じさらし台の上で、ピューリタン社会の厳しい掟によって裁かれる羽目になる。しかし、ディムズデイル牧師は、ヘスターは自分の名前は決して言わないだろうと確信した上で、聖職者の役割を上手に演じている。誠に欺瞞的な牧師であるが、これは作者によって敢て付与されている欺瞞性である。

物語の時代設定は、新大陸アメリカ17世紀初頭ボストンピューリタン社会である。厳密に言えば、1642年6月から1649年5月までの7年間を取り扱う物語である。

作家ナサニエル・ホーソンの先祖には、ホーソン家アメリカ初代で、クエーカー教徒への鞭打ち刑を命じた、ウィリアム・ホーソン(1607-1681)がいる⁴⁾。さらには、17世紀セイラム魔女裁判に判事として関わった二代目ジョン・ホーソン(1641-1717)は、絞首刑の立ち会いに少なくとも18回位立ち会ったと言われている⁵⁾。このような先祖の歴史は毒のごとく自分にも伝染しており、その罪業の歴史が消え去ることを心底より願っていたのが、『緋文字』の作者ナサニエル・ホーソンである。『緋文字』の序文でもある「税関」の章に、やはり、二人の先祖のことに触れ(名前は書かれていないが)、初代の先祖は厳しい迫害者で、「裁判官」‘judge’⁶⁾であり、「教会の指導者」‘a ruler in the Church’(9)であったと語られている。彼の息子も(これも名前が記載されていないが、アメリカ史を少しでも知っている者は誰でもジョン・ホーソンのことであることが前後の内容からすぐ推測出来るように描かれている)「迫害精神」‘the persecuting spirit’(9)を受け継ぎ、悪名高いセイラム魔女裁判判事として歴史に名を刻んでいるが、自分(ナサニエル・ホーソン)は、彼等の代表者として、そのような先祖の歴史によって受け継がれている「呪い」‘curse’(10)が消え去ることを切に祈るばかりであるとの心情が吐露されている。さらに、同じ章で、セイラムの魔女裁

判(1692年)で魔女達が絞首刑にされた首吊りの丘 Gallows Hillにもさりげなくではあるが言及している。

ナサニエル・ホーソーンは小説家なので、勿論、単に新大陸アメリカボストンピューリタン社会の歴史的事実を作品でただ再現するのが狙いではない。従って、ヘスターを歴史上実在した魔女として登場させている訳ではないが、世間の常識など全く意に介さず、自由奔放に生きようとする自由思想の持ち主であるので、一歩間違えると魔女と告発されても何ら不思議ではない人物として描かれていると理解しても差し支えあるまい。

広場に集まって来た人々も、クエーカー教徒の鞭打ちの刑か、あるいは、魔女の処刑かなと興奮していた様子である。従って、魔女裁判的な状況が背景に使われていることになる。『緋文字』そのものの時代設定は、1692年の悪名高いセイラム魔女裁判以前の時代設定ではあるが、歴史書ではないので、あまり時代設定年代に厳密に囚われる必要はなく、物語の本質を捉えることの方がより肝要である。

なお、ナサニエル・ホーソーン之母方の先祖の中には不義密通の忌むべき歴史もある。1680年のことであるが、妻の二人の姉と(一人は独身であり、もう一人は結婚して身籠っていた)関係を持ったとして訴えられたニコラス・マニング(1644-?)がいる。彼は、逃亡したが、二人の姉は捕らえられ、裁かれ、公衆の冷たい視線に晒された。姦淫も、先祖の歴史を熟知しているナサニエル・ホーソーンにとっては全くの未知の世界ではない。結局、ナサニエル・ホーソーンの先祖の歴史を振り返ると、迫害する側だけでなく、迫害される側の歴史もあることになる⁷⁾。いずれにしても、『緋文字』の物語が展開する時代は、正確な年代にこだわらなければ、ウィリアム・ホーソーン(1607-1681)、ジョン・ホーソーン(1641-1717)、それに、ニコラス・マニング(1644-?)達がそれぞれ後世に汚点の歴史を残すような生き方をした時代と同じ時代である。

新しい植民地の建設者達は、町が出来てわずか15年か20年位なのに、その処女地の一部を墓地と監獄の敷地にしなければならなかったと、「獄舎の門」の章に書かれてある。獄舎の門から、ヘスターは、暗い牢獄にしか馴染みがなかった、生後3月程

の赤子を抱いて、まるで、自分の自由意志によるかのように、看守とともに出て来たのであった。墓場と牢獄のために土地の一部を使わなければならなかったとの指摘は、理想郷の建設にすべてをかけた初期ピューリタン社会に対する皮肉たっぷりの作家のコメントである。もし、清教徒達の群れに、カトリック教徒がいたならば、赤子を抱いたヘスターに、これまで数多くの画家達が競って描こうとしてきた、聖母マリア像を思い出させるような姿を見いだしていたかもしれない、という作家の懇切丁寧な解説を読むと、処刑されても何らおかしくないヘスターを、なぜか、ナサニエル・ホーソーンは、特別に、実に大胆不敵な描き方をしている。

現実と作家の想像力を組み合わせて一種の中立地帯を創造するのが、ナサニエル・ホーソーンの特徴であり、注意深く観察しないと真意は掴めない場合が多いのに、初期植民地の抱える問題点や、ヘスターのことに限っては、ナサニエル・ホーソーンらしからぬ、誰にでもすぐに分かる見解を織り込んでいる。勿論、物語全体がこのように容易に理解出来るように描かれている訳ではない。

さて、物語の中心人物であるディムズデイル氏は神々しい青年牧師である。牧師職は、一般的に言えば、人々の内面の悩みに心を痛め、適切なアドバイスを与えて神にある信仰の旅路を奨めることであろう。ナサニエル・ホーソーン作品群には、ディムズデイル氏のような宗教家だけではなく、科学者、芸術家、医者等がなぜか、徐々に心身ともに誠にグロテスクな人物と化していくプロセスが描かれることが比較的多い。なぜ、そのような職業の人物を特に選択しているのかと言えば、そのような職業に就く人物は誰もが歪な精神構造と奇怪な行動の人物に墮すと考え、揶揄しながら書く為ではない。ある対象を鋭い観察眼で覗き見ていく過程で、精神や具体的な振る舞いまでもが尋常性を欠くようになる人物を描くためには、たまたまそのような職業の人物像がもっとも相応しいということなのだ。それ故、ディムズデイル牧師の場合も、決して最初から、ディムズデイルは、ボストンピューリタン社会の教会指導者であり、英国のさる著明な大学を卒業し、雄弁と宗教的情熱は、この人物が聖職者として高い位につくことを保証していたなどということだけで、ディムズデイル牧師を判断してはならない。

いや、むしろ、牧師職にある崇高な青年牧師という先入観で眺めると誤読の危険性が付きまとう。すぐれた天与の才と学識にも拘らず、どこか怯えており、自分だけの小さな世界に閉じ籠ってしまうような、ディムズデイル牧師の、牧師らしからぬディムズデイルらしさの特徴を拾い上げることによって、はじめてディムズデイル牧師の正体が見えてくる。

ナサニエル・ホーソンが、先祖のように教会指導者でなく、小説家として生きて行く上でどうしても避けることが出来ずに生涯苦しんでいたと言われることの一つは、他者の内面を凝視することに対する罪意識のようなものであった。この心理構造と似たような特質を付与されている人物は、ナサニエル・ホーソンの『緋文字』以外の作品にも登場する。

視覚的には見えない世界を覗き見る行為は、人間の内面を見つめることだけでなく、過去の歴史を掘り起こすことでもある。自分の先祖に忌むべき歴史があり、それを直視せざるを得なく、自分の血にもやはり先祖と同じように他者を裁く血、迫害者精神、狂気のようなものがあるのではないかと、ナサニエル・ホーソンは常に呻吟していた。作家修業の為に閉じ籠っていた部屋からは、自分の先祖達の墓場をよく眺めていた。

III

それでは、ディムズデイル牧師の諸々の特徴をまず押さえてみたい。チリングワース医師の診断によれば、ディムズデイル牧師は精神性ばかりの人間にも見えようが、実際には、父母から強烈な動物性‘a strong animal nature’（130）を貰い受けている人物である。しかし、この強い動物性とは如何なるものかという具体的説明は述べられていない。

ディムズデイル牧師は、自分を浄化するために、自らの肩をむち打ち、朦朧とした状態で徹夜の勤行さえする時もある。そうすると、しばしば彼の頭脳が錯乱し、若い時代に死んだ友や、聖者のような顔つきの父親や、母の幻さえ眼前にちらつくこともあった。自分自身を切り刻むような業をしてもさほどの効果はなかった。

また、ディムズデイル牧師は、誰をも自分の友として信じれない人間である。彼が牧師職に就いていることを考えれば、むしろすべての人間が神のもと

にある友人であるはずだが、どういう訳か、孤独で、悲しい淋しげな青年牧師である。

作者ナサニエル・ホーソンの大学時代のあだ名は「世捨て人」であった。かつ、ナサニエル・ホーソンは、大学卒業後、12年間故郷セイラムで、世間との交渉を断って（勿論、世間との関わりが皆無であったということではないが）作家修業をした。他者との絆、繋がりを積極的に持たなかったナサニエル・ホーソンの特質を思い起こさせるディムズデイル牧師の一面である。

さらに、チリングワース医師の診断によると、ディムズデイル牧師程、肉体と精神とが密接に結びつき一体化している人間はいない。肉体は視覚的に捉えられる。しかし、その奥に秘められている精神構造は、肉体から普段は掴めないものだが、ディムズデイルの場合は、精神が肉体化されているので、理解が比較的容易である。精神的な歪さを身体的なグロテスクさで表に引き出すのが、ナサニエル・ホーソンの常套手段である。

「精神の道具が肉体」という、チリングワース医師の診断はなかなか意味深く、作家ナサニエル・ホーソンの基本的人間観の一つは、まず、人間とは本質的には精神的存在であるということであろう。精神的存在といっても、崇高な宗教的存在ということではない。心の奥底には過去の歴史や動物性が蠢くような存在のことである。自分の先祖の忌むべき歴史に呪われていると認識するだけでなく、自分の内面に生き続ける毒素のようなものを凝視して悩むナサニエル・ホーソンと、ディムズデイルの特徴がだぶって見えてくる。

ディムズデイル牧師は、また、非常に内気で内向的気質の人物である。この内向的気質も、社交を好まず、どちらかかと言えば、引きこもって独り執筆に専念したがるナサニエル・ホーソン自身の特質でもある。勿論、ナサニエル・ホーソンは、セイラム税関で輸入品検査官として働いたこともあり、社交的経験が全くないという訳ではない。

ディムズデイル牧師は、罪と苦悩を背負って歩くことが宿命の人物である。ディムズデイル牧師は、自分を浄化するために、徹夜の勤行を行い、自分自身を鞭打つことさえあることは既に触れた。

ナサニエル・ホーソンのアメリカ新大陸初代（英国から米国に渡って来た）のウィリアム・ホー

ソーンは、絶対的平和主義者であるクエーカー（女性）教徒達への鞭打ちを命じた教会指導者であることは指摘済みである。ディムズデイル自身は、膝に震えがくるほど断食をし、ときには、部屋を暗くして、光をあてた顔を鏡に映して、それを見つめながら徹夜の勤行をする。魔女への鞭打ちを命じた先祖の歴史との絡みで眺めると何やら意味ありげな場面である。裁こうとする側であるディムズデイルを厳しく裁き、猛省を促す場面である。教会指導者側に姦淫の一方の相手を設定する事自体が、ナサニエル・ホーソーンが生きていた19世紀でも実に大胆不適な挑戦であるが、たとえ小説の中の出来事としても、17世紀、アメリカ新大陸の歴史が始まって間もない歴史にこのような事件を描き込むことの危険性を作者は十分承知していたはずである。

心の一番奥底にある苦悩だけが、この世で存在する唯一の真実であり、もし、微笑んだり、陽気な顔を取り繕ったりすることができるなら、ディムズデイル牧師というような人間は存在しなかったのだ、というコメントを読むと、不倫だけでは片付けられない何かを扱う物語ではなかろうかという思いを抱く。

ディムズデイル牧師が、誰にも見られないように、ある夜に、ヘスターがかつて立たされたさらし台の上で懺悔のまねをしている際に、まるで全宇宙の目が彼の心臓の上に釘付けになっているかのような恐怖におそわれ、以前からであったが、毒牙にかまれたような肉体的うずきを感じられたという説明からも、如何に苦悩の程度が深く、悶え苦しむ病的なものかが理解出来る。

ディムズデイル牧師は、ヘスターに、不義密通の相手の名前を明かしなさいと迫った時から、7年経過した後、森でヘスターと再会する機会に恵まれる。そこで、ピューリタン社会から逃亡して旧世界にでも逃げようと誘うヘスターの提案に同意してしまう。しかし、まもなく、自分は気でも狂ったのか、それともすっかり悪魔に身売りでもしたのかと猛省し、結果的にヘスターの誘惑を敢然と拒絶する結末へと繋がる。つまり、己の罪を選挙祝賀説教の後に、公衆の面前で告白し息絶えるのである。この場面は後程改めて詳細に検討する。

ディムズデイル牧師は、新大陸アメリカ17世紀ボストンピューリタン社会の人物であり、作家ナサ

ニエル・ホーソーンが生きた時代は19世紀である。作品の時代設定、舞台も重要な要素ではあるが、そうした事柄は一種の舞台装置であって、装置は、あるドラマを盛り上げるのに使用する装置に過ぎない。作品の本質を掴むために、思いきって、装置を全部剥ぎ取ってしまうことも時には必要である。背景となる装置をすべて取り除くと、ディムズデイル牧師の苦悩のみが残ることになる。勿論、他の登場人物が持つそれぞれの葛藤も当然含まれるが。

作品の『税関』の章に、先祖の消し難い悪行が自分にも伝染し、子孫である自分の魂を苦しめ続けており、そのような歴史の終焉を切に願うと明記してある作家ナサニエル・ホーソーンのコメントを大前提に読むことが非常に重要な意味を持ち始める。ディムズデイル牧師が、作家ナサニエル・ホーソーンの内面の苦悩と同じような痛みを背負っている人物に描かれているのは単なる偶然ではなくなる。

ディムズデイル牧師は、自分の心の全組織がある特定の病的な箇所から出る毒素‘the poison of one morbid spot’（140）に汚染されていると思い込んでいたとあるが、その毒素が如何なるものであるのか、そして、その毒の源泉への言及もない。さらに、如何にも畳み掛けるかのごとく、罪と苦悩、その正体が何であれ、兎に角その重荷を背負ってよろめき歩くことこそがディムズデイル牧師の宿命であったと語られている。

ディムズデイル牧師の胸に隠されているかもしれない「緋文字」の可能性もあろうが、『税関』の章の、先祖の咎が消えることを願う箇所との絡みで読めば、やはり、先祖の忌々しい歴史そのものが毒素の源であり、毒素とは、自分達の基準から外れた人間であれば冷静さを欠いてすぐにでも迫害し、抹殺しようとする魔女迫害時、あるいは魔女裁判時の精神構造そのもののことである。父母から譲り受けた「強い動物性」とは、このことを指し示すと読める。

このような読みをすると、一般的には『緋文字』の序文が「税関」の章であり、その後の「獄舎の門」から『緋文字』が始まると考えられているが、「税関」の章は、むしろ『緋文字』を解釈する上で絶対必要な章となる。

「税関」の章では、作家ナサニエル・ホーソーンが勤めていたセイラム税関での経験談なども語ら

れており、つまり、作家ナサニエル・ホーソンが生きていた19世紀のことであるが、その後、『緋文字』の事実上の1章とも言える「獄舎の門」という、17世紀ポストンピューリタン社会を扱う場面に移っていく。

筆者は、両方の世紀が同じ作品に描かれることが絶対必要条件と考える。なぜならば、17世紀の過去の歴史は全く別物で、19世紀と関係がないどころか、17世紀の歴史が、19世紀に生きる作家ナサニエル・ホーソンの内面にも生き続けていることを主張するには、これまた、重要な舞台装置である。装置は装置に過ぎないとも述べたが、ただ17世紀のディムズデイル牧師の苦悩を描くだけではなく、19世紀にもそうした歴史が伝染し、歴史というのは一旦作られると消し去ることの出来ない重みを持つことを主張する、装置以上の役割を演じる装置であり、よく計算され尽くした装置、配分構成である。

さらに、もう一つ付け加えるならば、ディムズデイルだって、自己の心理が朦朧とする程の業をする際には、父母の幻が現れるのであるから、一切合切がディムズデイル自身に責任があるというよりは、異端分子は処刑してでも排除するという「強い動物的毒素」は、実は、父母から譲り受けていることを暗に示しているとも読める。すると、17世紀以前をも指し示していることになる。従って、19世紀と17世紀の両方を描くことによって、あたかも現在から過去へと描いているようでも、過去から現在を描いているようにも見え、またまた過去の過去も描いているようにも見え始める。こうした見方をすると、過去も現在も、17世紀も19世紀も、いや17世紀以前も、人間の奥深い内面において繋がる事実を創造した作品であり、同じ毒素で苦しむディムズデイルとナサニエル・ホーソンが、二人の人物ではあるが、心の奥深い部分に共通の毒を抱える同一人物と見えても何ら不思議ではなくなる。

IV

さて、チリングワース医師、ヘスター、それにパールとは如何なる存在であるかをも検討しなければなるまい。『緋文字』は、ディムズデイルの一人芝居物語ではなさそうである。ディムズデイル以外の人物達もそれぞれに重要な役割を負わせてら

れている。

チリングワース医師は、ヘスターの法律上の夫であるが、ディムズデイル牧師は最初はその事実を知らない。勿論、物語の後半でヘスターより打ち明けられて、チリングワース医師の正体を知ることになる訳だが。

チリングワース医師は、自分の妻であるヘスターの密通の相手は、ディムズデイル牧師であることをうすうす感じ取り、衰弱している牧師をあたかも治療する医師としてディムズデイル牧師に寄り添うことになる。勿論、チリングワース医師の目的は、ディムズデイルの内面を覗き見て、じわじわと苦しめることであり、決して、治療ではない。ディムズデイルの肉体というよりは、精神的世界の奥深いところを執拗に覗き込むことに没頭する悪鬼的存在となる。

作者ナサニエル・ホーソンの、自分の先祖の犯した罪に悶え苦しむ姿がディムズデイルに反映していると看做すならば、そのディムズデイルの内面を覗き、その苦悩を暴き出して苦しめようとするのも、これまた、ナサニエル・ホーソンの悩みとの絡みを考えさせる。つまり、既に触れたことだが、芸術家として生きる上での、ナサニエル・ホーソンの心痛は、人間の魂を観察対象としてしまうことである。まさに、ディムズデイルの魂を覗き、攻撃するチリングワースはそのような人物である。この他者の隠された部分、埋葬しておきたいような世界を覗き見ることは、芸術家故の宿命ということも出来ようが、先程、言及した「毒素」との絡みで言えば、異質な世界を異様な程覗き見、迫害し、排除しようとする精神構造と同根の眼差し、行為である。

物語では、勿論、ディムズデイル牧師とチリングワースは別人物である。しかし、作者ナサニエル・ホーソンの影が両者に色濃く反映している人物達であることが判明した今、毒素の遺伝で苦しむ者と、その苦悩を覗き見る医師の双方が、ナサニエル・ホーソンの内面世界を背負う人物達に見える。ディムズデイルとチリングワースの二人に蠟燭の灯でも当てるならば、ぴったり重なる同じナサニエル・ホーソンの影絵が現れてくるのではなかろうかと思う程である。

ディムズデイル牧師が、物語の最終場面で、自分の罪を公衆の面前で告白して死のうとする時に、チ

リングワースは、不名誉なことを止めなさいと止めに入る役割も果たすし、遺言で、パールに財産をも残す。全くの無慈悲、冷酷な人間というわけでなく、人間的な温かみをも思わせるような箇所も付け加えられてはいる。しかし、本質的には、やはり、相手の魂を覗き込むことに没頭するという、ナサニエル・ホーソーンがもっとも忌み嫌う、人間の心という聖域に足を踏み入れるという、赦されざる罪を、ディムズデイル牧師に対して犯すチリングワース医師である。

V

さらに、ヘスターとパールの存在をそれならばどのように捉えるべきであろうか。勿論、物語では、ヘスターは、ディムズデイルとの肉体的結合の産物である娘パールを、社会の冷たい視線の中で育てあげる女性である。ヘスターは、一度はディムズデイルと旧世界と一緒に逃亡する計画も立て、ディムズデイルも同意するのだが、最終的にディムズデイルは自分の罪を公衆の面前で告白して死ぬ選択をする。その後、ヘスターもパールも旧世界に旅立つ。物語の最終章には、パールは幸せな結婚生活をしているようであるとの説明も付け加えられている。そして、ヘスターは、やがて、一人でボストンピューリタン社会に再び戻り、人々のカウンセラーのような働きを継続する。するといつの間にか、世間の嘲笑と顰蹙を買う烙印ではなく、尊敬をもって眺める象徴の緋文字に変化していく。

芸術家として生きて行く上でどうしても、他者と十分なコミュニケーションを築けない痛み、さらには、先祖の魔女裁判に関わった歴史に呻吟するナサニエル・ホーソーンであるが、作家ナサニエル・ホーソーンのもう一つの大きな特徴は、社会とは距離を保って生きたい願望がある。ヘスターは勿論芸術家として描かれている訳ではないが、ナサニエル・ホーソーンのような願望を作品世界で実際に生きる人物である。

物語では、ピューリタン社会の中で、世間に冷遇されても、そのような環境には決して左右されない毅然とした生き方を貫く。17世紀の魔女裁判の歴史等から判断するならば、極刑を受けても何らおかしくないヘスターを、既に触れたように、聖母マリアに譬えただけでなく、ディムズデイルやチリング

ワースの死後も生かし続けているのである。ディムズデイルを主要人物とするならば、彼の死で物語は終わってもよさそうなものだがそうはならない。ディムズデイルの死後、まもなく、まるで日光に曝されて萎れていく根こそぎにされた雑草のごとく、チリングワースは死んでしまうのである。しかし、ヘスターと娘パールだけは生き続ける。

ヘスターは、ロマン主義の象徴であり、ピューリタニズムとの葛藤ドラマ⁸⁾とも読みたくなるが、これまでの視点で彼女の特質を眺めるならば、明らかに、世間の法律を自分の法律としないヘスターの本質であり、これまた、作家ナサニエル・ホーソーンの本質的な特質の一つとぴったり重なる。世間が自分の作品を評価しなくとも、自分一人で冷たい社会的視線にも敢然と立ち向かわなければならない芸術家的気質が投影されている。芸術家的孤立、あるいは、芸術家的孤高とでも言えようか。ディムズデイルと不義密通の仲だった訳だから、その意味での動物性は共通であるが、社会との絆を断つ、具体的には、新大陸ピューリタン社会を離れ、旧世界に心が向いていることの象徴がヘスターである。ディムズデイルの物語が、何時の間にか、ヘスターとパールの物語へと移行する。

ナサニエル・ホーソーンは男性であり、ヘスターのような性を持つ存在ではないとの厳しい反論を招きそうだが、ヘスターの独立心が強く、自由思想的な特質は、ナサニエル・ホーソーンのコアとも言える特質なのだ。

結局、ディムズデイル牧師、チリングワース医師、ヘスターの三人とも、ナサニエル・ホーソーンの一要素をそれぞれ背負う人物達であることが明確になった。

ヘスターがヨーロッパから再び戻って来て、自分が罪を犯したボストンピューリタン社会で奉仕の生活をするのは、作家ナサニエル・ホーソーン、旧世界への関心も深い、やはり、アメリカピューリタン社会を捨てきれない一面が反映されている場面であろう。

ナサニエル・ホーソーンは、『緋文字』を1850年に出版するが、1842年には、ソフィアと結婚し、1844年には長女ユナが誕生している。そのユナがパールのモデルと言われている。ナサニエル・ホーソーンは、セイラム税関で働いただけでな

く、1853年から1857年までは、英国リバプールの米国領事館に勤め、一家で英国リバプールに住んでいる。このように、ナサニエル・ホーソーンは、実人生では、社会や他者との関わりを全く否定する人生を歩んだ訳ではない。ならば、今まで、私が主張してきたナサニエル・ホーソーン像はどうかと言われそうだが、これは、あくまでも、彼の作品に現れる自画像と思われるような人物の内面や行動パターン、ナサニエル・ホーソーンの内面に存在していた歴史認識、自己認識を私なりに解釈したナサニエル・ホーソーン像であることを断わっておきたい。勿論、そのような作家像は到底あり得ないでっち上げではなく、ある程度の一般性を持つものである。

それでは、パールの存在はとなるが、最終的には英国で幸せな結婚をしているパールの結末から、ナサニエル・ホーソーンの高い英国憧憬が読み取れる。この点は、私の以前の解釈と同じであるが、あくまでも、ヘスターの延長線上に、つまり、アメリカピューリタン社会には縛られない自由思想の中に、英国願望が含まれることになる。パールが、母親ヘスターと一緒にボストンピューリタン社会で過ごした子供時代のことであるが、植民地の子供達が、教会ごっこ、クエーカー教徒を鞭打つ迫害ごっこをしたりしても、それには決して加わりたしなかった。子供時代から、パールは、ボストンピューリタン社会に溶け込まない存在として描かれている。

IV

物語は、一見、17世紀ボストンピューリタン社会を舞台にした「ラブストーリー」にすぎない感もあるが、これまでの分析で、主要な登場人物達はすべて、作家ナサニエル・ホーソーンの影響を背負う、ナサニエル・ホーソーンの分身を演じる役者達であることが判明した。

それでは、そのような人物達の結末をも検討して、作家ナサニエル・ホーソーンの見解を探らなければならぬ。苦悶する人間の内奥を観察し、その治療には専念しないチリングワースには、極めて否定的である。ヘスターは、7年間、衆人環視の的となりながらも、毅然として自らの自由な生き方を貫く。一時、ヨーロッパに渡るがやがてまたボストンピューリタン社会に戻る彼女の生きざまに否定的

な響きはない。さらに、パールは、英国志向の象徴であるが、否定的な感觸など全くない。

ディムズデイルの最終場面をどのように解釈出来るだろうか。悪鬼のようなチリングワースから逃れ、ボストンピューリタン社会を去って旧世界にでも逃げようと誘惑するヘスターからも、ディムズデイルを最終的には引き離す。最後の告白で、「神の御旨を成したまえ」と祈って息を引き取る場面を、文字通り受け取っていいか迷う。また、ディムズデイルの胸にも緋文字を見たとか、いや、まったくそのような緋文字はなく、赤子のような清い胸だったとかの目撃証言からも、一つの明確な結論を導き出すのは困難である。ディムズデイル牧師に無理矢理告白させて、自ら死を選ばせているのではなく、己の意志による選択として語られてはいる。しかし、それでは全く自由意志からの行動かと言うと、同時に、無理矢理負わせられたような強引さと悲しさをも伴うかのようなディムズデイルの結末である。

ディムズデイル牧師は、一見、優しく弱々しく、自らの罪を悔いる青年牧師ではあるが、遺伝的な、迫害精神という毒を奥深い所に受け継いでいる人物である。そのようなディムズデイルに猛省を促し、厳しい裁きを課す場面である。だが、ピューリタニズムの教義に従わせ、自己の罪を公衆の面前で告白させ、崇高な死に方とも解釈されうる最後を演じさせてもいる。不倫体験を共有したという意味では、ディムズデイルもヘスターと同じ存在ではあるが、最後の土壇場で、ヘスターとは絶対に一緒に旧世界に旅立たせることをさせず、いささか突然、死に急がせた感がある。ディムズデイルの最終場面を如何様に解釈しようが、兎に角、毒素で心身の自由が効かなくなるような苦悶の終演を演じさせた場面である。

このように眺めると、ディムズデイルとヘスターの墓穴には、同じ一つの墓石が置かれているが、まるで混じりあう権利がないかのような少しの距離があるということも頷ける。つまり、ボストンピューリタン社会の自分の先祖と、ナサニエル・ホーソーンの本心の象徴でもあるヘスターの自由な生き方を貫く人物は、やがては同じ墓場に入る運命にあるだろうが、決して、一体とはなれない本質的な違いがある主張と読める。

『緋文字』の緋文字は、ヘスターの胸につけられ

た文字と理解するのが一般的である。しかし、これまでの考察から、作家ナサニエル・ホーソーンが、先祖と同じ毒素を持つ自分の精神構造をディムズデイル（チリングワースも含まれようが）に負わせた緋文字となる。つまり、作家ナサニエル・ホーソーン自身の内面に存在する緋文字Aでもあるのだ。「強い動物性」「a strong animal nature」の「迫害精神、排除の論理」が緋文字の意味であって、単なる姦淫「Adultery」の頭文字ではなくなる。

姦淫の場面を描かず、姦淫後のドラマであるので、姦淫は、自分が所属する社会の基準を踏み外す行為、異質性の象徴として使われているだけと考えるべきであろう。従って、この「animal」の頭文字の「A」が、緋文字のAと看做すことも可能になる。そして、このAの意味が変化することを、作家ナサニエル・ホーソーンがことの他強く願ったことは、ヘスターの最後の生きざまから読み取れる。しかし、ヘスターの自由奔放な思想と行為も、他者との共存を拒絶し、他者を排除する動物性に繋がる危険性を孕むものであることも忘れてはならない。

物語とは直接的関係はないが、ナサニエル・ホーソーンは、1864年5月に亡くなり、自分の先祖達が眠るセイラムではなく、マサチューセッツ州コンコードのスリーピー・ホロー墓地に埋葬された。夫の死後、妻のソフィア（物語のヘスターと直接的関係があるとは考えられないが、ヨーロッパにソフィアが憧れていたことは事実なようである）は、三人の子供達と一緒にヨーロッパに渡った。その後の詳しい事情は筆者の勉強不足でまだ十分な検証が出来ていないが、妻ソフィアと、パールのモデルとなった長女ユナの二人は、英国ロンドン郊外にあるケンザルグリーン墓地の小さな一つの墓に埋葬されている。

作品の時代性、アメリカ性などを十分に調査して、文学作品を読むのが正当なアプローチであることは筆者も十分承知している。文学作品は、一般的には作家の個人的な伝記ではないから、あまりにも作者の家系の歴史や、作家個人の内面の苦悶との絡みで作品を眺めすぎてはいけないことも先刻承知である。しかし、今回の考察で明らかになったように、『緋文字』の作品自体だけでなく、作家ナサニエル・ホーソーン自身の内面に蠢く苦悶、先祖の数々の悪行等をチリングワース医師のごとく注意深く

覗き見ると、今回のような読みに誘われる要素、材料があまりも多く見える。

注

- 1) Walcutt, Charles C. "The Scarlet Letter and Its Modern Critics," *Nineteenth-Century Fiction*, 7(March 1953), pp. 251-264.
- 2) Hugo Mcpherson, *HAWTHORNE AS MYTHMAKER* (Toronto: University of Toronto Press, 1969)
- 3) Jammshed A. Khan, 'Atropine Poisoning in Hawthorne's *The Scarlet Letter*' *The New England Journal of Medicine*. Vol. 311, No. 6 (Aug 9, 1984) pp. 414-416.
- 4) Robert L. Gale. *A NATHANIEL HAWTHORNE ENCYCLOPEDIA* (New York: Greenwood Press, 1991), pp. 217-218.
- 5) *A NATHANIEL HAWTHORNE ENCYCLOPEDIA*, p.215.
- 6) *The Centenary Edition of The Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Univ. Press, 1962), I *The Scarlet Letter*, p. 9 本稿のNathaniel Hawthorneの作品からの引用はすべてこの版による。以下、*The Scarlet Letter*からの引用は頁数を括弧に入れて示す。
- 7) *A NATHANIEL HAWTHORNE ENCYCLOPEDIA*, p.301.
- 8) Randall Stewart *American Literature & Christian Doctrine* (Baton Rouge: Louisiana State University Press., 1958), pp.83-89.